

川村吾蔵－乳牛のツルータイプを制作した日本人

松中照夫*

1. はじめに

話は今から95年前の1916年にさかのぼる。その頃、酪農はアメリカの重要な産業として、まさに発展しつつあった。ミネソタ州で酪農を営み、かつ、ビール会社の社長でもあったフレッド・パブストは、その発展をさらに加速させるために乳牛の改良が必須であると思っていた。その改良目標として、理想の乳牛はかくあるべきという具体的な像が欲しかった。もちろん、理想像であるからそのような乳牛は現存しない。それゆえ、誰かがその理想像を具体化して制作する必要があった。

では、いったい誰にその像の制作を依頼すれば良いのか、パブストは悩んだ。悩んだ末に決めた依頼先は、ニューヨーク在住のGozo Kawamura (川村吾蔵) だった(写真1)。依頼を受けたGozoは、6年もの歳月をかけて理想的な乳牛の姿をブロンズ像に制作し、世に送り出した。それが、アメリカ初の乳牛のツルータイプ(True type)である(写真2)。

わが国でも乳牛改良が進められている。その目標



写真1 川村吾蔵(佐久市川村吾蔵記念館 HP より)

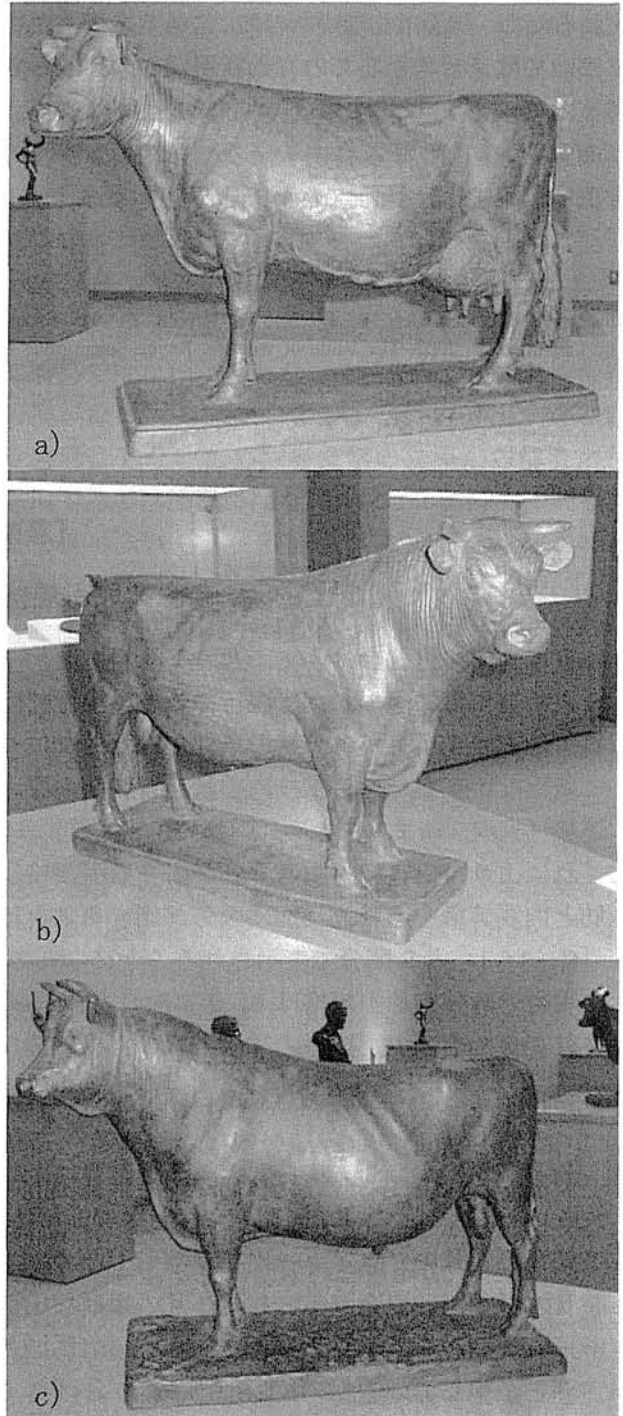


写真2 川村吾蔵が制作したツルータイプブロンズ像(1923年制作, 佐久市川村吾蔵記念館所蔵)
a) ホルスタイン・フリージャン種の牝, b) 同, 牝
c) ジャージー種の牝

はこのツルータイプといって過言ではないだろう。しかし、アメリカのツルータイプそのものは、実在の乳牛の姿から作られたものではない。川村吾蔵が苦勞して理想的な体形を割り出し、創作したものである。つまり、わが国の乳牛改良家が追い求めてきた乳牛は、日本人・川村吾蔵が作り上げた理想の牛だったのである。

2. 川村吾蔵との出会い

筆者は、酪農に関わる仕事に従事しておよそ40年になる。その間、各地のJAなどのカウンターでホルスタインのツルータイプ模型をしばしば見ている（写真3）。しかし、その像の原型が日本人彫刻家によって制作されたことは全く知らなかった。月刊誌「酪農ジャーナル」2010年11月号のカラーグラビア記事で、その事実を初めて知った。同誌の表紙は乳牛と若い農婦とからなるブロンズ像であった。後述するように、この表紙のブロンズ像を見た瞬間、筆者の心はその像に強く惹きつけられた。その解説記事で川村吾蔵（1884～1950）と出会った。

川村吾蔵の生涯は、「彫塑家・川村吾蔵の生涯」¹⁾や「ぼっかりふんわり川村吾蔵物語」²⁾などの著書に詳しい。また、川村吾蔵記念館図録³⁾にも、美術史家である岡部による論評が掲載されている。本稿では、これらの著書からの引用で、この Gozo Kawamura こと川村吾蔵の生い立ちを紹介する。そして、彼がホルスタイン・フリージャン種の理想像を完成させたという事実を改めて確認し、彼の業績を再評価したいと思う。

3. 川村吾蔵の生い立ち

1) 芸術家めざし渡米－20歳

川村吾蔵は1884年8月17日、長野県南佐久郡臼田村で父・豹治（のち、兵次郎と改名）、母・せむの三男として生まれた。川村家は代々、田野口藩の代官を務める家柄だった。臼田尋常小学校、長野県立尋常中学校上田支校（のち長野県立上田中学校、現県立上田高校）を卒業した後、吾蔵は東京の大学進学を希望する。しかし、同じ頃、父と母を亡くし、大学進学の道は閉ざされ、横浜の貿易商山本商店に就職。失意の内に、吾蔵は自分がかつて得意とした美術の道に進みたいと思うようになった。父の一周忌のために横浜から帰郷した時、芸術家になりたいことを二人の兄に訴え

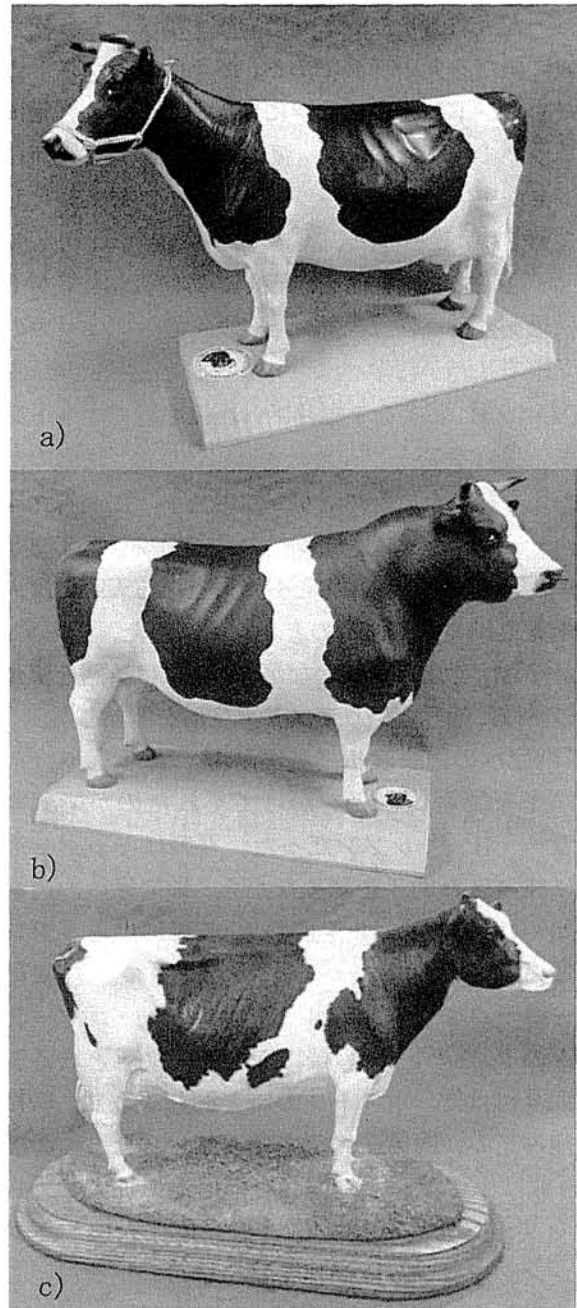


写真3 米国の保証書付きツルータイプ像
（酪農学園大学家畜繁殖学研究室所蔵）

a)とb)は1970年代のツルータイプで、川村吾蔵の制作したツルータイプの影響が強く現れている。a)はホルスタイン・フリージャン種の牝、b)が同じく牝である。c)は、最新のホルスタイン・フリージャン種の牝のツルータイプで、a)に比べると体形がやや細身で鋭くなっているように見える。台座の裏面に添付されている保証書によると、この像はC.M.Herden氏が制作したものであると明記してある。

た。そして兄たちを含め三人で祖父に渡米の許可を願い出て、許しを受けている。1904年、20歳を目前とする時だった。

吾蔵の渡米には二人の人物が大きな影響を与えている。一人は前述した山本商店の娘・清子、もう一人は縁戚にあたる丸山晚霞である。清子はピアニストになるためロンドンとウィーンに留学しており、吾蔵にヨーロッパの様子を語っている。晚霞はアメリカ滞在経験や滞在中にはヨーロッパにも渡り、水彩画家として暮らしていた。帰国後、彼は小諸義塾の教師として赴任し、吾蔵に滞米生活を語っている。若き吾蔵がそれらに触発されたのは当然だった。晚霞はアメリカの美術学校で基礎から学べばよいと吾蔵に勧めた。

1904年9月、およそ1ヵ月半の航海を経てボストンに到着。20歳を船上で迎えた吾蔵は、早速、晚霞の友人天野氏を訪ねた。天野はすでにボストンにあるクインジー・デッサン・スクールへの入学手続きをすませている。同時に、吾蔵は身元引受人となる天野の友人で美術蒐集家・松木文恭のところへ行った。そして、松木が経営する店を手伝いながら、夜には英語とデッサンの学校に通うというアメリカ生活を始めた。

2) 彫刻家への道—渡仏、英国疎開、帰米

ボストンで吾蔵に目をかけてくれたのが彫刻家ヘンリー・H・キッソンだった。吾蔵はキッソン教授宅に住み込み助手を務めながら、彫刻家への道を歩み始めた。しかし、2年後の1906年にはキッソンのもとを離れ、ニューヨークへ旅立つ。吾蔵はニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインのR. T. ベーン教授に面会し、助手となる約束を取り付けた。ボストンの時と同じように、教授宅に住み込み、内弟子修行を積んでいった。この間に、吾蔵は小さな原寸の作品を何倍かに拡大して銅像やレリーフを作り出す機械（立体拡大機、エンラージングマシン）の操作を身につけた。彼は、この技法を改良して独自の機械を開発し、後にこの分野での創作活動に身を捧げることとなる。

1910年7月には、アメリカ人彫刻家にとっての登竜門、フランス行きを果たす。ベーン教授の紹介で、フレデリック・W・マクモニス（1863～1937、写真4）の助手になる。26歳だった。マクモニスはフランス在住のアメリカ人彫刻家の第一人者であった。マクモニスの指導を受けつつ研鑽を積んだ吾蔵は、1912年、フランス国立美術学校エコール・デ・ボザールに2番の成績で合格した。翌年には同校の特待生になった。日本人としては初の快挙だった。同校の記録によれば、歴代の在学日本人美術家の中で、吾蔵が最

高の成績を取っており、吾蔵の他に特待生となった



写真4 吾蔵の制作によるフレデリック・マクモニス像（1924年頃、佐久市川村吾蔵記念館所蔵）

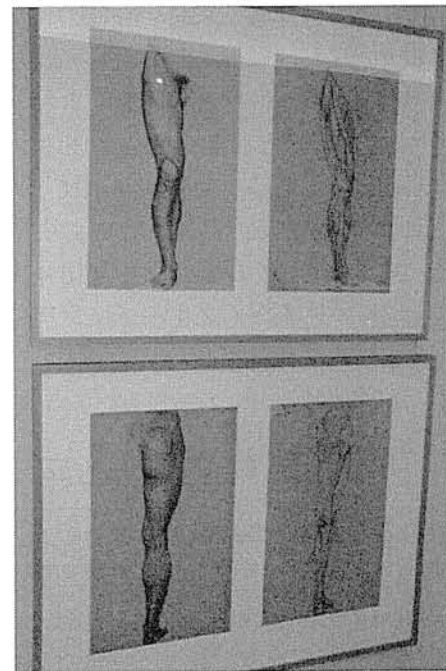


写真5 エコール・デ・ボザールでの芸用解剖学講義のノート（1912～13年ころ、佐久市川村吾蔵記念館所蔵）

者はいないという。

この美術学校の授業内容は高度で厳しかった。彫刻の基礎となる人体の解剖までおこない、骨格の詳細、肉体の一片一片にメスを入れた。まるで外科医師のようであった。その時のノートが現在も残され

ている（写真5）。またこの頃、マクモニスのところからニューヨーク市から市庁舎前庭に「市民道徳」をテーマとする彫刻モニュメント（公共記念碑）の制作依頼があった。マクモニスは吾蔵と彼の兄弟子にあたるマガーギーを実質的な共同制作者としてこの制作にとりかかった。この後、吾蔵はマクモニスとともに数々の大型モニュメントを制作した。大型モニュメントには吾蔵の立体拡大機の技術が必要だった。しかし、アメリカ市民権のない吾蔵が制作者として作品に明記されることはなかった。むしろ、吾蔵は名前が出ないことを承知の上でこの制作活動に参加した。それは、渡仏以来、無名の学生であった吾蔵を守り育ててくれた恩師への感謝の気持ちからだった。

エコール・デ・ボザールに在学中、吾蔵はルーブル美術館をしばしば訪れていた。そこで当代きっての彫刻家オーギュスト・ロダンと知り合う。この70歳の巨匠は、吾蔵に対して何度も自分の助手になるよう要請した。しかし、吾蔵には敬愛するマクモニスから離れる気持ちがなかった。ロダンには丁重にその要請を断った。それは「ゴゾー、金はないが私と一緒に働いてくれないか」の言葉にこめられた恩師の気持ちが決め手だった。

1914年、第一次世界大戦が勃発し、吾蔵はマクモニス夫妻と共に、戦渦のフランスからイギリスへ疎開した。イギリスではセント・ジョンズ・ウッド美術学校に在籍し、教育にも従事した。翌1915年、吾蔵は師匠と共に再びフランスに戻り、戦火で破壊された巨大モニュメント「市民道徳」や「プリンストンの戦い記念碑」の原型を修復した。

3) ツルータイプの制作－「牛のGozo」誕生

1916年、32歳となった吾蔵はニューヨークに戻った。すでにマクモニスとの共同制作者として名をなしていた。そこへ、冒頭で述べたように、ミネソタの酪農家パブストから制作依頼が舞い込んだ。依頼は、アメリカでこれから目指していくべき理想の乳牛像、ツルータイプを制作して欲しいというものだった。

パブストは吾蔵を一流芸術家として遇し、テキサスの農場に牛の研究所兼アトリエを設け、長期滞在を可能にした。当時の吾蔵は、牛について全くの素人であった。しかも、めざす牛は現存せず、将来かくあるべきという理想の体形を持っていなければならぬ。その理想像を求め、吾蔵はアメリカだけ

でなく、カナダ、メキシコの酪農場を訪れた。訪問先で優れた乳牛を観察し、理想の乳牛というものを

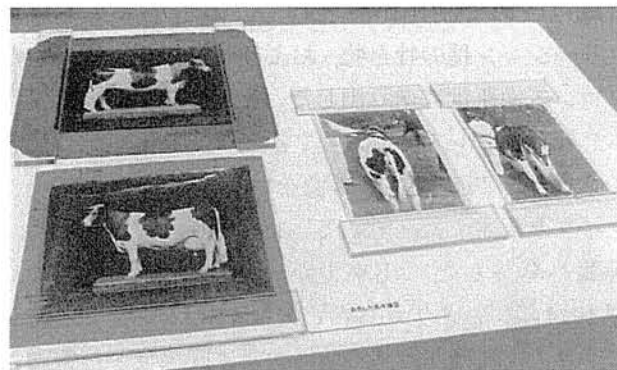


写真6 右) ツルータイプを求めて各地の優秀な乳牛を写真におさめた。写真には吾蔵による赤ラインが記入されている。左) 出来上がったツルータイプに黒と白の彩色を施したもの。
(佐久市川村吾蔵記念館所蔵)

頭に描き、それを具体的な造形にするためだった。ここで役だったのが、エコール・デ・ボザール在学中に身につけた解剖学の知識だった。優秀な乳牛を観察し、その体形、皺、血管、そして筋肉など、さまざまな要素を組み入れ、理想の体形を求めていった（写真6）。この理想像を求めた時代、吾蔵は彫刻家の領域を超え、ジャージー種の牡牛をホルスタイン種の牝牛に交配させることで理想的な乳牛が生産されるのではないかと考えた牛の品種改良の世界にも没頭したという。

吾蔵は「これ以上の完璧なホルスタイン牛はない」という言葉を残し作品を完成させた。依頼されてから6年もの歳月が過ぎ去っていた。出来上がった吾蔵の作品は、ホルスタイン・フリージャン種乳牛協会の審査を受けた。1922年6月6日、期待通り、画家エドウィン・マガーギーの画いた牛の絵と共に「理想のホルスタイン牛」として、シカゴで開催された全米牧畜業大会において最高賞を受けた。幾つかの新聞がこの時のことを報じている。その中でアメリカン・アグリカルチャ紙は、「次代のアメリカ酪農の牛はこの理想像に必ず到達する。この大事業は長い年月をかけてアメリカの酪農を飛躍的に発展させる基礎をつくった。これはアメリカ経済にとっても大きな利益をもたらすであろう」と述べている。クリーブランド新聞は、「ゴゾー・カワムラの牛は、今後、アメリカの牛の品評会の基準となる。

この体形に最も近くなるように飼養された牛が一等賞となるであろう」と報じた。

1923年、わが国では関東大震災が発生したその年、吾蔵は改めて制作作品としてこのホルスタイン・フリージャン種の牡と牝、およびジャージー種の牡のブロンズ像を世に送り出した。その作品が前出の写真2である。ホルスタイン・フリージャン協会は当初の予定通り、このブロンズ像をホルスタインのツルータイプと認定した。そして、100対制作するように、吾蔵へ発注した。出来上がったツルータイプは、翌1924年、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、カナダ、日本などにある農科大学に同協会から寄贈された。こうして「牛のGozo」という名前が全米はいうに及ばず、ヨーロッパの酪農家にまで知れわたった。当時のアメリカ大統領カルビン・クーリッジも吾蔵の名声を知り、自身の胸像制作を依頼している。

4) 数多くの肖像彫刻と帰国—後半生

乳牛のツルータイプ制作中にも、吾蔵は師匠マクモニスとともに数多くの巨大モニュメント制作に関わっている。その代表作にはニューヨークのワシントンスクエアにある「凱旋門」や、プリンストン大学近郊の公園内に設置された「プリンストンの戦い記念碑」などである。またこの頃から晩年にかけて、アメリカの著名人の他に、野口英世や同郷の島崎藤村、さらに尾崎弴堂、斎藤博駐米大使、徳富蘇峰夫妻などの肖像彫刻を多数制作している。

しかし、時代の流れは日米関係を少しずつ悪化させていった。1924年には新移民法の成立で日本人のアメリカ移民が全面禁止された。両国関係がさらに悪化した1939年、斎藤駐米大使から帰国するように勧められる。大使が急死した後も、後任の堀内謙介大使やニューヨーク総領事だった若杉要らが帰国を強く勧めた。結局、当時の国家的大事業「皇紀二千六百年奉祝美術展覧会」に、畏友野口英世と急逝した斎藤大使の功績をたたえるための胸像を展示したいこと、また、日米関係の緊張緩和に少しでも貢献したいとの吾蔵の思いから帰国を決意した。1940年だった。20歳で単身渡米して以来、36年ぶり、56歳の帰国だった。

5) 日米の架け橋として—晩年

帰国した吾蔵は、米国滞在中に再婚した伴侶、しおり(旧姓、前野)とともに東京の世田谷区経堂にアトリエを構えた。しかし、帰国翌年1941年には太平洋

戦争が開戦、制作活動はままたらなくなった。1944年、戦禍が激しくなった東京を避け、郷里の臼田町(現、佐久市臼田)へ疎開。しかし、故郷の人たちは吾蔵家族をアメリカ帰りのスパイではないかと白眼視し、快く受け入れてはくれなかった。まさに村八分、不遇の内に吾蔵は一時期農業に従事する。こうして信州の田舎で息をひそめた生活を送った。1945年8月15日、日本の敗戦でようやく戦争が終わった。

戦後、軽井沢に米軍が駐留してきた。長野県はその通訳に吾蔵を委嘱。吾蔵がその業務にあたっているうちに、この吾蔵こそがあの有名な「牛のGozo」、巨大モニュメントの制作者ゴゾーであることが知られる。そして1947年、彼は横須賀基地の美術最高顧問として招かれた。これは芸術家ゴゾーに敬意をいただき、援助を送り続けた米陸軍第8軍司令官アイケルバーガー中将の指示であった。横須賀で吾蔵は、ベントン・W・デッカー海軍中将から広さ300坪もあるアトリエが与えられた。住居とアトリエを貸与された吾蔵は水を得た魚のように、再び旺盛な創作活動を開始する。この1947年から1950年に胃癌で亡くなるまでの間、吾蔵は連合国総司令部最高司令官ダグラス・マッカーサーをはじめとする軍関係者や、妻しおりと親交のあったヘレン・ケラーらの胸像など、多くの作品を残している。

ただし、吾蔵は病状悪化のため、マッカーサーの胸像は石膏原型までしか制作できなかった。その完成をまたず、1950年3月11日、横須賀のセント・ジョゼフ病院で逝去した。65歳だった。しおり夫人は吾蔵の遺志をうけつぎ、娘幸子とともにマッカーサーの胸像の完成を急いだ。横須賀基地の米兵達もその作業に協力した。このいきさつは「GOZOを救え! 国際愛の力作」という見出しと共に、毎日新聞が同年3月17日に報じている。しおりらは胸像をまもなく完成させた。完成した胸像は1950年10月、第6回日展に出品された(写真7)。作品が入選したのはいうまでもない。

吾蔵がアメリカの土を再び踏むことはなかった。しかし、戦後に制作した多くの作品はアメリカ人の帰国時に持ち帰られている。マッカーサーの胸像も、米国陸軍士官学校(ウエストポイント)に記念像として永久保管されることになった。このことをしおりと幸子はアイケルバーガー中将からの書簡で知る。妻と娘は、そのことを喜びを持って吾蔵の遺影

に報告した。

「牛の Gozo」の生みの親だったパブストは、吾蔵が日本へ帰国したことも、戦後マッカーサーの胸像を制作したことも知らなかった。しかし、吾蔵の



写真7 ダグラス・マッカーサー胸像
(1950年完成、佐久市川村吾蔵記念館所蔵)

訃報を知った彼は、吾蔵を追憶するためにマッカーサーの胸像をアメリカに移送することに尽力している。こうして吾蔵は、戦後の日米の架け橋として大きな役割を果たした。

4. 吾蔵の作品「朝の祈り」

筆者と吾蔵を結びつけてくれたのは、先述したように月刊誌「酪農ジャーナル」の表紙に掲載された「朝の祈り」という小品であった(写真8)。筆者はこの表紙の写真を眼にした時、直ちにその作品の原物を見たいと思った。それは、自分の愛する乳牛を背中にして、朝、天に向かって祈りを捧げる若い農婦の声なき祈りの声が聞こえたからである。その祈りは、「今朝もこうして、家族も、愛する牛たちも健康で元気に平和な朝を迎えることができました。ありがとうございます。昨日までと同じように、今日も、牛も家族も無事に生活できますようにどうかお守り下さい」というようであった。その祈りの声を嬉しげに耳をそばだてた牛と一緒に聞いている。その牛の視線が実にやさしい。そこに、若い農婦と牛とのむつまじい愛情の交流を感じとれる。昨年、口蹄疫で殺処分される牛を見つめ、涙ながらに別れを告げた宮崎県の肉牛農家の思いが、筆者の心

の中をよぎった。まさにこの牛も、農婦のかけがえのない家族の一員であるということが、ひしひしと伝わってくる。忘れかけていたかつての小規模家族経営の酪農場を思い出させてくれた。



写真8 朝の祈り
(1944年制作、佐久市川村吾蔵記念館所蔵)

この作品が、1944年の制作であることにも留意しなければならないだろう。そのころの吾蔵は、先述したように疎開先である郷里臼田町で、村八分同然の扱いを受け、息をひそめ肩身の狭い思いで生活していた時代である。戦況悪化の日々に、平穏で自由な生活を待ち焦がれていた吾蔵は、その思いをこの像の「祈り」に託したのではなかろうか。その切ない吾蔵の胸の内がこの小品から見えてくる。この「朝の祈り」は吾蔵作品の中でもあまり注目されていない。しかし、筆者にとってはホルスタインのツルータイプの美しい造形美以上に、この小品に込められた吾蔵の思いで胸が震えた。

5. 佐久市川村吾蔵記念館

佐久市は郷土の偉大な、しかし、活躍の場が外国であったためわが国ではあまり知られていない彫刻家、川村吾蔵の業績を顕彰する記念館を2010年3月30日に開館した(写真9)。川村吾蔵記念館⁴⁾は、わが国に2つしかない星型様式城郭として有名な龍岡城五稜郭公園内にある(もう一つの星型城郭は、函館の五稜郭)。吾蔵の遺族が旧臼田町に寄贈した彼の作品を中心に展示している。JR小海線臼田駅から、ゆっくりと歩いて行ける。途中の道は浅間山を遠くに眺め、水田に囲まれている。のどかで気持ちいい。酪農関係者、とくに乳牛改良をめざす人達には是非一度足を運び、吾蔵のツルータイプを生で見たい。そのすばらし

さに圧倒されるだろう。そしてその脇にある「朝の祈り」にも対面して欲しい。筆者が感じた感動とはひと味違う別の思いを持たれるかもしれない。

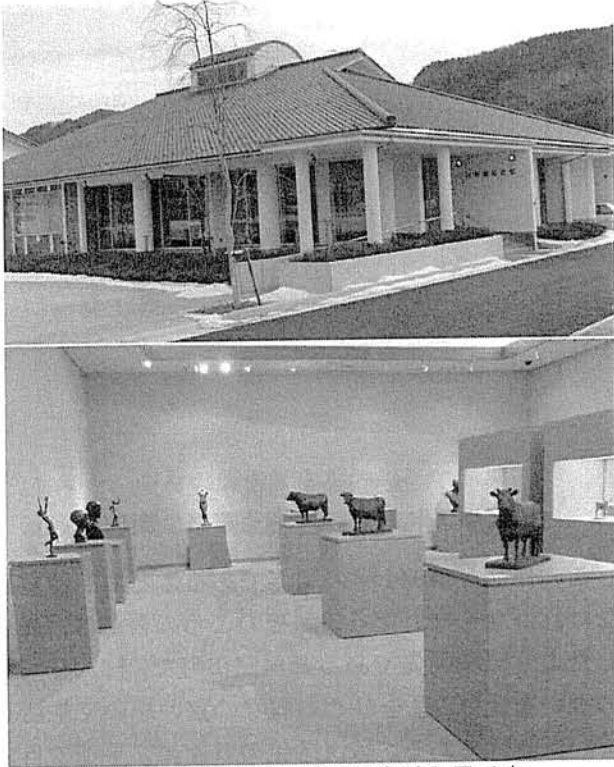


写真9 佐久市川村吾蔵記念館と展示室

謝 辞：本稿の内容、とくに吾蔵の生い立ちは下記文献からの引用によって執筆したものである。原著者に対して心から感謝したい。月刊誌・酪農ジャーナル編集部の塩出真司編集長、ならびに編集アドバイザーの淡田亜沙美氏は、筆者と吾蔵の出会いを与えてくれた。淡田氏の記事がなければ筆者は永遠に吾蔵のことを知らなかっただろう。深く謝意を表したい。酪農学園大学家畜繁殖学研究室小山久一教授には、米国の保証書付きホルスタイン・フリージャン種ツルータイプを見せていただいた。そのご厚意に心から感謝する。

引用文献

- 1) 飯沼信子 (2000) 彫塑家・川村吾蔵の生涯, 舞字社, p.1-238.
- 2) 新海輝雄 (2008) ぽっかりふんわり川村吾蔵物語, (株) 襟, p.1-355.
- 3) 佐久市教育委員会 (2010) 川村吾蔵記念館図録, p.1-77.
- 4) 佐久市川村吾蔵記念館 (2010)
<http://www.city.saku.nagano.jp/cms/html/entry/1679/348.html>